

性差からみた男と女のメンタルヘルス
—うつ病の病態をモデルとして—

順天堂大学越谷病院メンタルクリニック 教授
鈴木 利人

2013 年 5 月に米国精神医学会が改訂した精神疾患の診断・統計マニュアル (DSM-5) によれば、初めて性差 (Gender Differences) という要因が精神疾患の診断や症状の諸特徴に影響を及ぼすことに言及された。性差はさまざまな精神疾患の成立や治療に関わっているが、なかでも近年増加しているうつ病の症状や経過に性差が関わっていることが 2000 年以降に多く報告されるようになった。うつ病は、先進国ではほぼ一致して女性が男性の 2 倍生涯有病率が高いことが知られている。有病率だけではなく、うつ病の特徴には男女間でさまざまな相違があり、その背景には男女間の生物学的 (bio-)、心理学的 (psycho-)、社会文化的 (social-) に異なる特徴が影響していることを理解することが重要である。

まず生物学的には、中枢神経系の解剖学のおよび機能的な性差が存在するだけでなく、性ホルモンによる精神機能への影響が大きいことは知られている。後者の影響を反映する疾患として、女性では月経前不快気分障害 (DSM-5) や更年期うつ病、男性では加齢男性性腺機能症候群、いわゆる LOH (late-onset hypogonadism) 症候群が挙げられる。一方、心理学的、社会文化的要因も精神疾患の発症や症状の特徴に大きな影響を与えている。うつ病に親和性のある病前性格やストレス環境に対するコーピング特性は男女間で異なるために、精神的変調をきたした際の対応は男女間で異なることがある。このほか、生物学的および心理学的要因が複雑に交錯する女性のうつ病として、非定型うつ病という特異なうつ病や、妊娠期・産褥期にみられるうつ病などが挙げられる。

本シンポジウムでは、以上のような男性、女性のうつ病について生物学的、心理学的、社会学的な各方面から多面的に考察し、その予防や治療について考えるとともに、男女の健全なメンタルヘルスのあり方について考える。